

ただ個人的には、公道に対しても堂々と自己主張するような、はみ出した鳥居が好きだった。はみ出しているからこそ、車や人が譲り合って暮らしており、そのことに風情も感じていた。

莫大な予算が組まれるプロジェクト、大勢のマスコミが押し寄せる事件や事故。それも確かにニュースであるのが、何の変哲も無い日常が繰り返され、毎日の中で少しずつ変化が起きていく。そこにこそニュースがあり、歴史へと繋がっていくのかもしれない。そんな風に感じ始めた翌日の平成七年五月十八日、いわき民報の社会面には、移り変わる四枚の鳥居の写真と共に、鳥居解体の記事が掲載された。

現在、八幡宮の前には、袖のない鳥居が当たり前の様に建っている。私自身も、もう記者は辞めてしまったけれど、あの時感じた思いは今も少しも変わっていない。

(いわき歴史文化研究会会員)



八十八膳献穀会 会員募集

奉耕会員 二十五名
賛助会員 五十九名
特別会員 五名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は、古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には糯米を作り畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解して、更に受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解いただき、多くの皆様がご入会くださいますようお願い申し上げます。

結 yui No.14

発行日 平成18年10月7日
発行所 八十八膳献穀会
〒970-8026
福島県いわき市平八幡小路8-4
飯野八幡宮 社務所内
TEL 0246-21-2444
飯野八幡宮 web
(「結」既刊分はこちらへ)
<http://www.noteplan.net/8man/>
発行責任者 飯野 光世

お印となった『高野槇』折笠 三郎

平成十八年九月六日、秋篠宮家に長男がご誕生し国内に祝賀ムードが拡がっている。お名前が「悠仁(ひさひと)」に決まり、身の回りの品につける「お印」は、常緑高木「高野槇(コウヤマキ)」に決まった。

ところで、飯野八幡宮の境内にもコウヤマキがある。神楽殿の脇にあるのが一きわ目を惹く大樹である。そのほか樹高五、六メートルのコウヤマキが二本植えられている。この二本の木はいわき平ロータリークラブから献木されたものと宮司さんから伺った。傍らには「環境保全記念樹・平成二年十一月吉日・いわき平ロータリークラブ」の標柱が立っていた。

コウヤマキはコウヤマキ科コウヤマキ属に分類される。従前はスギ科に含まれていたが、葉の形態の違いから現在は独立の科として扱われ、日本にだけ自生している樹木、いわゆる日本固有種で、一科一属一種の針葉樹常緑高木である。マキ、ホンマキ、トウマキ、ママキ、カラカサマキなどの別名がある。

自生は福島県(西会津町安座が北限)以南の本州、四国、九州で、和歌山県高野山に多いのでこの名がついたという。ヒノキ、スギ、アカマツ、ツガ、モミとともに「高野山六木」、木曾にも多くヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコとともに「木曾五木」にも数えられる。

幹は直立して三十〜四十メートル、径は一メートル以上になる。樹皮は赤褐色、縦に裂けて長い鱗片状となりはがれる。長枝と短枝があり、長枝には長さ約二ミリの卵状三角形をした鱗片葉がある。短枝の葉は表と裏に窪みがあり、葉裏の中央に白い気孔帯がある。長さ十センチ内外、二葉が融合し十五〜二十片輪生し、雌雄同株である。

花期は四月で雄花は枝先に頂生し、穂状花序をつける。雌花も枝先に頂生する。球果は長さ十センチ、直径六センチほど。

どの松笠状を呈し翌年の十月ごろ成熟する。種子は楕円形で褐色、両側に翼があり約一センチほどの長さである。

大きく真っ直ぐに伸び、整然とした円錐形の、コウヤマキの樹形はあたりを払う風格を感じさせる。そのためヒマラヤスギ、コバノナンヨウスギとともに、世界三大庭園樹といわれ、公園、庭園社寺などに広く植えられている。

材は緻密で耐久性があり、心材は淡黄褐色で特有の芳香がある。水湿にも強く、用途は、碁・将棋盤、風呂桶、流し板、桶類、天井板・鏡板・柵板などの建築材などに広く用いられる。また樹皮は槇肌として船舶や桶などの水漏れ防止の材料となる。

高野山に参詣したときに聞いた案内人の説明では、仏花として球果のある枝葉を用いると言い、実際墓前に供えてあった。なお、京都では盃蘭盆にミソハギ、ハスとともにコウヤマキを仏花にするという。

古い時代には現在よりも広い範囲に自生しており、万葉集のなかにもコウヤマキを詠んだ歌がある。

(いわき郷土史サークル会長)



八月二十五日、八十八膳献穀会会員により注連縄奉製勉強会が開催された。以前は経験豊かな神社総代たちの手により注連縄が緇なえられていたが、後継者育成の一環と会員の親睦を図ることなど目的として、八十八膳献穀会の年間事業の一つとなっている。

神社には鳥居や拝殿などに藁で緇なった注連縄がみられる。地域によってその形状は若干の差はあるが、意味合いはおなじみである。すなわち、神代の時代、天照大神が天の岩戸からお出になつた後、岩戸に縄を張り再び中に入れぬようにした。いわゆる「尻久米縄」と云われたと古事記に記され、注連縄の始まりとされている。

また、注連縄には清浄・神聖な場所を区画するため引き渡される、という意味もある。地鎮祭などで祭場となるところの四方に斎竹を立て、



今アメリカでは環境に優しく省エネルギーのこのストローベイル・ハウスが注目されている。われわれは、自然素材の家ではなく、有害な化学合成物質に囲まれた家に暮らしている。このような状況にいち早く気付いた人たちの間から、ストローベイル・ハウスは普及し始めた。化学製品、工業製品の拒否、商業主義建築の排斥といったポリシーに基づき、シンプル、ナチュラル、エコロジー、ローコストといった最先端のテーマを追った結果たどり着いたのが、ストローベイル・ハウス建築なのである、ということが紹介されていた。

台湾の前の總統の李登輝氏が「文明は伝統の上に築かれる。伝統を大切にしない国に発展はない。」と述べられていた。まさに真実ではないだろうか。我々の先人たちは藁、土、漆喰、木という自然の素材を存分に取り入れ素晴らしい文明を築きあげてきたのである。今一度立ち止まり熟考する価値があるだろう。

今年も氏子総代達の手により素晴らしい注連縄が奉製された。それは朝日に輝きとても美しいものであった。

(飯野八幡宮 宮司)



注連縄を張り巡らし祭壇を設け、神籬ひもろぎを差し立て御祭神の降臨を仰ぎ神事が執り行われることは、人口に膾炙かいはしていることである。この神事につかわれる注連縄は左緇なえとされている。これについては諸説があるが一般に使う縄と神事に使う縄と区別したものと考えられる。

飯野八幡宮では、毎年九月十五日の例祭の前の九日に円座的祭が斎行される。そのときに氏子総代が参集し、八十八膳献穀会で前年刈り取った神饌田の藁に若干会員の藁を足し、鳥居や社殿を装う百尋ももひろひら千尋ちひろの注連縄を緇ない、円座的を奉製するのである。

近年藁以外で作られた注連縄を見かけるが、やはり藁が注連縄にもっとも相応しい素材ではないかと思う。この藁という素材はお米を主食としている私どもにとってあまりにも身近な存在であるが、昭和四十年ごろから農家の機械化がすすみ稲刈りにも変化があらわれ、機械で刈り取るようになった結果長い藁が急速にその姿を消し、利用されることが少なくなった。

それまでは、藁は生活のあらゆるところで活用されてきた。例えば家の屋根材、室内の敷物、蓑笠、鞋、縄等々いたるところで活躍していた。珍しいところでは、馬や牛の蹄を保護する馬鞋、牛鞋まで作られていたようだ。これらの藁は様々な用途に利用され、最後は自然に戻すというサイクルになっていたのである。

過日、滋賀県の成安造形大学の大岩剛一教授が提唱されているストローベイル・ハウスについて目にする機会があった。それは、アメリカで提唱された建築方法であり、家畜の飼料用に圧縮加工した藁をブロックとし、その藁ブロックを積み上げて壁を作り、表面を粘土で塗りさらに漆喰で固めると、シンプルで美しい家が出来る。藁壁の家は壁厚が四十〜五十センチもあるため断熱効果に優れ、冷暖房エネルギーの大幅な削減が出来る、という建築方法である。藁、土、漆喰という自然の素材作られた家は、まさに昔の日本の家そのものである。

飯野八幡宮の鳥居 礎上 知予子

詳しい経緯は忘れてしまったが、飯野八幡宮の鳥居の建て替えを取材したことがある。

当時、いわき民報社で記者をしていた私は、その日情報提供を受けて出掛けて行った。八幡宮までは歩いてもせいぜい十分程度で、目と鼻の距離といえるが、気が急いでいたせいか、鳥居の前に着いた時には肩で息をしていた。

その頃の八幡宮の鳥居は、二本の柱の両わきにいわゆる袖が付いた「両部鳥居」という形であった。目の前は市道で、袖の部分が道路にはみ出して通行を妨げる恰好になっていた。八幡宮の宮司家に伝わる「飯野家文書」が、平成六年に国の重要文化財に指定された際、鎌倉時代に書かれた鳥居の差図（設計図）が見つかり、本来は袖の無い「八幡鳥居」だったことが判った。ちょうど、ふくしま国体が開かれる前で、近くにある磐城高校がバスケットボールの会場になったことから、鳥居を本来の形に戻して通行を円滑にする準備が進められていた。

八幡宮に着いた時、鳥居は撤去作業が始まったばかりだった。「間に合った」と思い、手際よく進む作業にしばらく見入っていた。クレインが上の部分から木材を吊って外し、解体は進められていった。気がつくとも夢中でカメラのシャッターを切っていた。何枚も何枚も。時折、強い雨が降って、チェーンソーの音が響く中、鳥居が少しずつ消えていく姿を目で追い、シャッターを押し続けた。

夕方まで二、三時間はそこにいただろうか。鳥居の前は磐城高校の通学路にもなっていて、朝とまったく違う八幡宮の姿に驚く高校生の姿があった。「すっきりしていい」と話す子もいた。